会　議　録

会議の名称	令和３年度　第２回上尾市幼児教育推進協議会
開催日時	令和４年２月７日（月） 午後３時００分から午後４時３０分まで
開催場所	上尾市役所７階教育委員室及び各所属施設等（オンライン）
議長(委員長・会長)氏名	首藤　敏元
出席者(委員)氏名	（1号委員）首藤　敏元、寺﨑　恵子 （2号委員）長　　いづみ、熊坂　恵子 （3号委員）田中　元三郎、田中　栄次郎 （4号委員）小林　斗志子 （5号委員）安田　治子
欠席者(委員)氏名	なし
事務局(庶務担当)	【関係職員】 保　育　課：藤波　伴安 教育センター：田﨑　守 【事務局】 学校教育部　：瀧沢　葉子、関　孝夫 指　導　課：瀧澤　誠、山田　絵美、野間　衣里

会議事項	1　議　題	2　会議結果
	（1）報告 ・幼児施設視察 ・上尾市幼・保・小連携合同研修会 （2）協議 ・幼児・保育施設での発達支援の必要な幼児に係る課題解決の手立てについて ・発達支援を必要とする幼児の小学校への接続に関する現状と課題の把握について	別紙のとおり

議事の経過	別紙のとおり	傍聴者数　　０名
会議資料	・第２回上尾市幼児教育推進協議会次第 ・（資料１）幼児施設視察実施報告書 ・（資料２）上尾市幼・保・小連携合同研修会報告書 ・（資料３）協議資料（１） ・（資料４）協議資料（２） ・（資料５）上尾市幼児教育推進協議会委員名簿 ・（資料６）上尾市幼児教育推進協議会条例 ・（別冊資料）上尾市発達支援相談センター事業報告 ・（別冊資料）上尾市教育センターの手引き	

議事のてん末・概要に相違なきことを証するため、ここに署名する。

令和４年　２月28　日

議長(委員長・会長)の署名　首藤敏元

報告（１）幼児施設視察

意見・感想 【首藤委員長】	視察に協力いただいた田中委員に感謝申し上げる。とても良い保育が行われており、幼児一人一人に丁寧な保育が行われている様子が分かった。丁寧な保育は、日本の幼児教育・保育における特性の一つであり、とても重要だと思う。なかなか数値化しづらく分かりづらいため、人に伝えるのは難しいが、視察に行かれた委員の皆さんからは、その丁寧さがとても魅力的だったという報告をいただいた。このような実践が上尾市の私立幼稚園・認定こども園全体に広がると良いと思う。この点については、田中委員が市内の私立幼稚園・認定こども園のリーダーとして、今後も協力いただきたいと考えている。

報告（２）上尾市幼・保・小連携合同研修会

意見・感想 【首藤委員長】	この幼・保・小連携合同研修会は、幼稚園・保育園と小学校の実践の発表からお互いが学ぶことで、幼稚園・保育園の先生にとっては、大切に育ててきた子供が小学校に就学し、どのように生活しているのか、小学校でその子供の個性が分かってもらえているのだろうかというような心配をもって送り出した子供たちの様子を具体的に知る機会となり、とても貴重だと思う。また、小学校の先生にとっては、幼児教育・保育を実際見て学べるという意義もあると思う。その後の、対面でのグループディスカッションや意見交換は、その意義も大きかったと思う。
意見・感想 【寺﨑副委員長】	頂いた資料を読み、去年、一昨年と参加した際のことも含めて、だいぶ小学校の先生の意識が変わってきていると感じた。これまでは、「小学校に入ると、こういうことができていない」というような話が出たり、「卒園の時まで、あるいは入学の時までに、このような事はできるようにしていてほしい」というような要望に、幼・保が応えていくというような様子が研修会で見られたりしていたが、この感想一覧を見ていると、小学校の先生方が、実際に入学前にどんな生活をしていたのか非常に丁寧にとらえていけるようになってきていると感じた。また１０の姿の共有が、小学校から歩み寄っていくというような形でだんだんと理解が進んでいるのかなと感じた。幼・保の世界において、生活の一つ一つを丁寧にとらえ、１０の姿に結び付けて子供を理解しようとしている姿が、小学校の先生方にもだいぶ伝わってきているのではないかという印象を持った。今後は、小学校の先生が、「できる・できない」ではなく、子供一人一人の持ち味を、これまでの経験・体験に照らし合わせて、どのように実際の教育活動・学習に、つなげていくかという部分をもっと具体的に考えていけるステップに入っていけるのではないかと感じた。
意見・感想 【首藤委員長】	１０の姿を幼・保の先生がどのようにとらえているのかを知るだけでも小学校の先生にとってはプラスになったかと思う。要録の中に、１０の姿に沿った記載はあるが、なかなかイメージできない先生が多いのではないかと思う。文部科学省では、幼・保の５歳児と小学校１年生の「幼保小の架け橋プログラム」をスタートしようと

意見・感想 【首藤委員長】	しているが、今後、さらにこのような交流会の意義が大きくなっていくのではないかと思う。

協議（1）幼児・保育施設での発達支援の必要な幼児に係る課題解決の手立てについて

意見・感想 【田中(元)委員】	全埼玉私立幼稚園連合会では、特別支援を必要とする子供の研修会を年に2回ほど実施している。今年度はコロナの関係で実施できなかったが、例年、特別な配慮が必要な子供がいるクラスの担任の先生が希望し、研修を受けている。私自身も特別支援委員会の委員の一人として携わっているが、研修の内容は、担任の先生が、特別な配慮が必要な子供も含めて、クラス全体をどうまとめていくかという内容であり、特別な配慮が必要な子供の個々に対する指導については、発達支援専門員巡回事業を活用し、専門員の方の助言を聞いて、それぞれどう対応したら良いか学んでいる状況であり、今後も、個々の子供に対する指導については巡回される専門員の先生方に細かに指導していただきたいと思っている。また、子供は半年一年たつと変わっていくもので、その子供がどのように成長したのか、逆にマイナスの成長をしてしまったのかというところを含めて指導していただくと現場の先生方は助かるのではないかと思っている。子供はそれぞれみんな違ったところがあるため、個々の子供を丁寧にみていかないといけない。卒園までの間に、どうすればその子供が小学校に入学しても適応できるのかどうかというところまで十分考えて進めていきたいと考えている。今後とも発達支援専門員巡回事業については丁寧な指導をお願いしたい。
意見・感想 【首藤委員長】	研修内容については、個別の子供に対する指導についてというよりも、幼・保としては、発達支援が必要な子供を含めてクラス全体をどうまとめていくのか、学級経営に関する関心が非常に高いという意見をいただいた。個別の子供に対する指導については、発達支援専門員巡回事業における専門員の先生からの指導、保護者と連携した関わりも必要になってくるかと思うが、そうような方向での研修や巡回指導が必要ではないかという意見だった。田中委員からは、進んだ意見をいただいたが、まだ世の中には、特に私立幼稚園には、障害のある子供の受け入れを断ったり、保育所に行ってくださいというような対応をしたりする施設が多いなか、みやした幼稚園では、特別な配慮の必要な子供を受け入れていただいていると感じた。そのような特別な配慮の必要な子供を加配の先生に任せるのではなく、担任の先生はその子供を含めて全員の担任であり、その子供もクラスの一員であるということを他の子供たちも自覚しているというような指導をなさっているところにとても感心した。
意見・感想 【安田委員】	先生方が、クラス全体をどうまとめるかということを色々悩んでいるという話があったが、クラス全体がまとまっていく背景には、やはり一人一人の子供の力が合わさってそれがクラス全体の力に影響するものだと思う。担任の先生が、クラス全体のことについて悩まれ、指導について色々考えている背景には、やはり一人一人の子供について、どのようにその子供に関わっていけば良いのかということを普段日常の中で悩まれているのではないかと思う。そして、私自身が気になっていたことは、確かに発達支援を必要とする子供は多いのかもしれない。それは、昔に比べて多くなっ

意見・感想 【安田委員】	てきたということかもしれないが、発達支援が必要だろうと思う子供を見ていて思うのは、その子供たちがまだいわゆる障害者というわけではなく、発達支援が必要な子供で、場合によっては走り回ってしまったり、飛び出してしまったり、先生の話を聞きにくかったり、注目が弱かったり、集中する力が弱かったりという子供は多い。ただ、その中身が様々であり、その子供自身の問題もあるが、場合によっては愛着障害の子供もいる。色々な考えられる背景があり、そこに気持ちを寄せて分析していきながら色々な指導方法を模索していくというところが、先生方が日々行っている幼児教育の難しいところではないかと思う。
意見・感想 【首藤委員長】	研修の講師になる先生は、特別支援教育が専門で、特別支援を専門にしている先生というのは、幼・保でのクラス運営はあまり経験がないのではないかと思う。幼・保の先生方からすれば、その子供の特性から、その子供には何が必要かという手立てを考えていく。その手立てを考えながら、クラス全体をまとめていくというところを、研修会等を手掛かりに、日々の努力とその先生のセンスも合わせて指導がなされているのではないかと思う。ストレートに、このような子供がいる場合は、クラス運営はこのようにすると良いというような話は聞けないと思うが、その部分は、先生方が研修の内容を園に持ち帰り、情報共有をしながら話合いを進めていく中で、先生方が作り上げていっているのかなと思う。そのような話合い、情報共有の時間を工夫して作り出しているというところも意義があるのかなと思う。またそのような時間を作り出すというのが課題の一つにもなってくるのかなと思う。
意見・感想 【安田委員】	担任の先生方は孤独ではないかと感じる。自分のクラスをしっかりまとめないといけないという責任感を持っており、熱心で、一人一人の子供に向き合い、しっかり応えてあげたいという先生がとても多いと感じる。先生方が抱えている問題を、一人で考えなさいとは言われてはいないとは思うが、責任感があるがゆえに、一人で何とかしなくてはと、もがいている先生の姿をどこの幼児施設に行っても感じる。先生方は、ものすごく孤独で頑張っているのかなと思う。その孤独な部分を、どうやったら少しでも軽くしてあげられるか、子供の発達支援ではあるが、やはりそこに向き合う先生方に対しての支援をしていくことが、間接的に子供への支援につながるのではないかと思う。それは研修会等の勉強の場というところで解決することもあるが、自分のクラスのこの子供のここというような問題に、ヒントになるようなことやその悩みを一緒に共有できる人がいると、先生にとっても、ものすごく楽になるでしょうし、そのクラス運営も良いものになるのではないかと日頃感じる。
意見・感想 【首藤委員長】	とても大事な点だと思う。先程の幼児施設視察の報告のなかでは、クラス編成の際に担任の組み合わせを工夫する等、配慮をしているとのことだったが、それも解決策の一つだと思うし、研修会等で参加者同士が対面で意見を言い合う、こんな悩みを抱えているのは私だけではないという体験をすることも大事だと思う。もっともっと発達支援専門員の方がたくさんいて、何かあればすぐに相談できる体制があれば良いが、なかなかすぐに聞けないという現状もあるのではと思う。これも課題の一つになると思う。

意見・質問 【安田委員】 意見・質問 【安田委員】	「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を確認したときに、それらを目指して指導しなさいと提言されていると思うが、そこに向けて多くの先生方が日々、幼児教育を行っているとすれば、小学校に就学した時に何が問題になるのか、小学校の先生方が抱えている問題や難しいところ、それは発達支援を必要としている子供だけの問題なのか、というところも含めて簡単に教えていただきたい。
回答 【首藤委員長】	10の姿というのは、達成目標ではない。全員が10の姿で描かれている姿にならなくてはいけないということではなく、あくまでも保育内容を実践していく中で子供が身に付けていくだろう姿であり、個人差はある。丁寧な保育を行う担任の先生のもとで、そのような幼・保の環境の中で、この子供はこういう姿を見せるようになりました、この子供はこういう姿です、そのようなことを要録に記載していっていると思う。それを小学校の先生が見て、どのような学級経営をしていくか、クラス編成を含めて、その部分は重要だろうと思う。今でも小学校の先生の中には、10の姿を点数化して欲しいという話もある。10の姿を点数化し、どこまでできるか、この子は8ポイント、この子は10ポイントというふうに、点数化して欲しいという要望に応えようとする幼児施設もある。保育園ではあまりないが、幼稚園では、そういった成績をつけたがるところも中にはある。文部科学省はそれを否定しており、埼玉県も同じく否定しているが、10の姿を達成すべき姿だと捉える風潮があるのは確かであり、そのような見方をすれば、発達支援を必要とする子供というのは、非常に厳しい立場に置かれる。
回答 【田中(元)委員】	確かに10の姿は示されているが、幼児期に獲得するべき子供の能力は、基本的に、「他者の話をきちんと聞く」、「落ち着いた生活をする」という2点だと思っている。クラス全体の中に発達支援の必要な子供がいても、それをどうやってみんなで仲良く包み込んでいき、温かい雰囲気の中でクラス運営をしていくかを考え幼稚園を運営している。この段階まで子供ができた方が良いというように、数値で表すことはない。その姿に向けて指導していくことは大切だと思うが、やはり子供の時に獲得すべき能力というのは、周りの状況をよく見て、その時に応じてどういった態度を取るべきか分かる、話をちゃんと聞くという能力が、小学校に入ってから、子供が伸びていく基本的な能力だと思うので、日頃から教員には伝えている。
意見・感想 【首藤委員長】	とても大事な点だと思う。視察の際にも、静かに先生の話を聞けていた、聞ける幼児が多かったという意見があった。10の姿でいうと、「社会生活との関わり」、「道徳性・規範意識の芽生え」なのかもしれないが、やはり先生が、子供たちの興味関心を捉えた話題で、子供に聞きやすい話し方で、子供たちも、先生の話を考えながら、理解しながら好奇心をもって聞いていて、また保育室や教室も、人の話を聞けるような環境を作っているといった様々な要素が合わり、人の話が聞けるという姿になると思う。このような関わり方をすれば、この子供はこういう姿まで発揮できる、そのような関わり方を小学校でも引き継いでもらう。発達支援が必要な子供の場合は、こういう配慮をすればこの子供はここまで成長した姿を見せるから、小学校でも続けていこうという手立てをしていくと考えていただくと良いと思う。支援の接続、幼児教育の接続という部分になってくると思うが、単に子供の姿の連続ではなく、そうような観点が必要ではないかと思う。

意見・感想 【小林委員】	小学校の代表として思うことは、先程、小学校に就学して困ったことについて質問があったが、小学校ではなるべく困ったことが起こらないように、地域の保育園や幼稚園とも情報交換をし、10の姿や3つのめばえについても、低学年の先生方には、印刷物を配布し学んでもらっている。小学校への入学は、子供たちにとって大きな環境の変化であり、つまずいてしまうと、長い義務教育でつまずいてしまうため気を付けている。発達支援の必要な子供については、特に丁寧に情報交換をしていかないといけない。発達支援相談センターが行う発達支援専門員巡回事業はとても良い事業だと思う。安田委員が関わっている子供を小学生になっても続けて見て頂ける制度があると良いと思う。幼稚園や保育園を卒園すると安田委員との関わりがなくなってしまうのは残念に思う。小学校に入学してきた発達支援を必要とする子供で、専門員の方々が関わってきた子供については、小学校でも継続して見てもらえるような制度があると、支援の連続性が達成できるのではないかと感じる。小学校では、新学期に向けて、準備を整えているところではあるが、まだ足らないところもいくつかある。地域の保育園や幼稚園と連携しながら子供の困りにつながらないようにしていきたいと考えている。
意見・感想 【田中(栄)委員】	私は、平方幼稚園の園長でもあるが、平方小学校の校長でもあるので、そのような視点から話をすると、小林委員からも話があったが、専門員の巡回指導は、絶対に必要だと思っている。担当教員を孤立させないという話にもあったように、担当教員から相談を受けた時の答えを管理職が持ち切れていないという現実もあり、その部分では、担当教員が欲しい解決策を提案してあげられるのは、専門家でしかないのではないかと思っている。研修についても話があったが、学級担任としては、まずは全体的なクラス運営について研修で学ぶと思うが、その後は当然、個々の児童のつまずきに対する指導方法についての悩みが出てくるため、全体の研修ではカバーできない研修を担当教員は欲しがっているのかなと思う。それは、外に出ていく研修ではカバーできないもので、学校や幼稚園等に入ってきてもらえないと見えない内容だと思う。今、その機会が年に1、2回のなかでやっていただいているが、そのような機会を増やしていただいたり、集中して1週間来ていただいたりするということが可能であれば、担当教員も少し解決策が見えてくるのではないかと思う。また、10の姿に関して、小学校の先生の困り事について質問があったが、私は基本的に2つだと思っている。小学校に就学してきた時の友達との関わりが持てない子供はやはり集団に属しにくい。また、先程、田中委員がおっしゃっていたことだが、先生の話が聞ける力が備わっていないと、教員がいくら話をしても聞いてもらえず、教員にとってはお手上げといったような状況が生まれる。私は基本的にこの2つが育ってきてくれていると、先程、点数の話も出たが、たとえ8点でも5点でも3点でも、どんな子供でも小学校でまた育て上げていけば良いと思っている。
質問 【首藤委員】	発達支援専門員の巡回指導は必ず必要だ、もっと機会を増やしてほしいという意見が出た。専門員の巡回指導は、上尾市の教育委員会が紹介してくれるのか。
回答 【事務局】	発達支援相談センターから派遣される。

質問 【首藤委員長】	幼稚園から発達支援相談センターに要請をして、派遣してもらっているということでよいか。
回答 【事務局】	はい。
質問 【首藤委員長】	平方幼稚園も同じか。
回答 【田中(栄)委員】	今年度は申し込んでいないが、基本的には同じだと思う。
質問 【首藤委員長】	あと、公立保育所の熊坂委員のところや私立保育園の長委員のところも、発達支援相談センターからの派遣か。
回答・意見 【熊坂委員】	保育課にも関わってもらっているが、発達支援相談センターから専門員の方に来ていただいている。先程、職員が孤立しやすいという話があったが、必ず、カンファレンス等は、担当教諭と所長や主任保育士が入る形でカンファレンスを聞いて、職員が皆で共有し、施設全体で関われるように巡回指導とその後の手立てをつなげていくというのが大事だと思う。
意見・質問 【首藤委員長】	発達支援相談センターは福祉機関ですので、保育所の方が相談しやすいと思うが、幼稚園でも福祉や教育という意識をせずに、発達支援相談センターに依頼すれば活用できるという体制が整っており、発達支援相談センターの役割はとても大きいと思う。福祉の観点からすると、子供は0歳から18歳までなので、発達支援相談センターで小学校就学後の子供もカバーしていると思うが、やはり学校教育という部分で、教育センターの役割も大きいと思う。特に不登校等という問題が出てくると、教育センターが深く関わってくると思う。幼・保において巡回指導を受けてきた子供についての特性の理解や、専門員からのアドバイスが小学校まで上手く接続されているのか、連携しているのだろうかというところが気になる。本日の協議事項(2)にも関わる事項なので、後程話をしたい。 巡回指導は年に何回までといった制限はあるのか。実際にみやした幼稚園では年に何回と決めているのか。
回答 【田中(元)委員】	特に決めていないと思う。
質問 【首藤委員長】	ということは、気になる子供がいれば、何回でも来ていただいて構わないのか。
回答 【田中(元)委員】	そんなに何回もという訳にはいかないと思うが、年に2回から3回までは来ていただいている。
補足説明 【事務局】	発達支援相談センター事業報告書の11ページに実績が載っている。詳しくは発達支援相談センターでないと説明はできないが、予算もあるため、何度もという訳ではないと思う。
意見・感想 【首藤委員長】	幼稚園、保育園、保育所、学童にも巡回指導を行っていることが分かる。発達支援相談センターの役割は非常に大きいと思う。人が動けばそれだけ経費がかかると思うが、この部分は将来的にもっと必要になってくると思うので、予算が増えることを願う。

質問 【首藤委員長】	保護者への関わり方について悩みを抱える教員が多いという事について、発達支援を必要とする子供の場合、保護者も同じような特性をもっていたり、発達障害だけでなく、安田委員から愛着障害という話も出たが、不適切なしつけ、不適切な子育てから、発達障害のような行動特徴を示す子供もいたりする。特に虐待は第4の発達障害と言われるように、特別な配慮が必要な子供の背景が複雑になっている。もちろん保護者の問題も複雑になってきている。保護者との関わりに悩みを抱える教員に対しては、どのような支援をしているか。また今度どのような支援が必要になってくるのか。
回答・意見 【安田委員】	保護者への関わり方について先生方は日々非常に悩んでいる。子供のことで気になることの相談、どういう対応をすれば良いのかという相談に加えて、保護者にどうやって伝えたら良いのかという相談が最近とても多い。先生方は、子供たちの困り事をどうやって伝えれば良いのか、本当に細やかに丁寧に考えている。私自身が伝えていることは、まず、事実を伝えた方が良いということ。それがどの時期であっても、そうように伝えている。ある事実を伝えることと、それに対して丁寧な指導をしていきたいと思っているということについて、保護者とまず共有することが第一段階だと思っている。そこから先、保護者とどのように話合いを共有していくかというところは、初めの入り口さえできれば、どういった指導を行っていくか保護者との間でやり取りができていけば良いのかなと思っている。ただ、先程、委員長がおっしゃるように、最近は対応が難しい保護者が多い。先生方が、「少しお話がしたい」と声掛けをした途端、拒否する保護者も多いので、どのように保護者に声掛けをしたらよいかと悩んでいる先生は多い。ただ、どの年代の子供でも、先生方が丁寧に指導しているということを保護者に伝えて、その事実を共有するということが第一歩ではないかと思っている。
感想・質問 【首藤委員長】	担任の先生がやるとなるとハードルが高いなと感じるが、平方幼稚園では、このような場合は管理職が保護者に伝える役割を担うのか。
回答 【田中(栄)委員】	基本的に、まずは担任教員が保護者に連絡を入れている。例えば、授業に参加できない、学校や幼稚園から飛び出してしまうといったような場合は話が別だが、基本的に子供の気になる部分についての連絡、最初は担任教員が務めることが多い。ただ、先程話にも出たが、保護者とのやり取りの中で、入り口が上手くできれば上手く進むが、できなかった場合、特に、幼稚園、小学校低学年の子供の場合、保護者がその事実を理解したくない、その事実がすっと保護者の中に入っていかない、また、それがいけないことだと捉えて抵抗する等、保護者への対応に苦慮することも多い。さらに、保護者に事実を伝えようとすると、幼稚園や小学校の支援の仕方が悪い、なんで先生がこんなふうに指導してくれないのかというように言われるケースもあり、そのようなケースが多くなると、担任教員も、保護者に連絡をすること自体を嫌がる。その後、管理職が出ていったとしても保護者に聞いていただけない傾向が強い。その点はすごく悩みの種ではある。
感想・質問 【首藤委員長】	平方幼稚園は、今はベテランの先生しかいないが、新人教員が多い場合等は、主任教員や園長の役割も大きいと思う。田中(元)委員は保護者とのかかわりについてどのように工夫されているか。

回答 【田中(元)委員】	田中(栄)委員がおっしゃるように保護者のなかには、事実を伝えても、素直に聞いていただけない保護者は多い。特に子供が2歳、3歳くらいだと、保護者が、この子は必ずいつか普通の子供と同じように追いつくのではないか等というイメージをもってしまい、なかなかその入り口に到達できない。思い込みのようなものを保護者がもってしまうと、丁寧に説明してもなかなか理解していただけないことが多い。最近は特にそのような保護者が多いと感じる。先日、女性が出産した乳幼児を殺害し、遺体を公園に埋めてしまった事件についての記事を読んだが、その女性がもつ課題をこれまで保護者も学校も気付いていなかった。子供が小さい頃から、課題のあることについては丁寧に保護者に伝え、その子供が将来大きくなった時にどのような生活をしているだろうかと想像していただけるような保護者になっていただかないといけないのではないかと思う。安田委員がおっしゃるとおり、事実をきちんと説明するということは重要であり、保護者が聞いてくれなくてもやはりきちんと説明して、職務として、「あなたのお子さんをこういうふうに見ているのですが、この辺が色々と課題があるので、ぜひよく家庭でもお子さんを見て頂きたい」と説明する必要があると思う。担任教員も、それなりに多くの子供を見ていると、それぞれの特性についてよく分かってくるので、保護者が話を素直に聞いてくれない場合は、園長なり主任教員も含めて、面談を行っている。また、各クラスに防犯カメラを設置しているので、保護者に来ていただき、子供の生活を保護者自身の目で見て頂いている。小学校に入ってから、いじめにあう可能性も出てくるため、できる限り保護者に理解していただくようにしている。
意見・感想 【首藤委員長】	幼児期の場合、衝動性・多動性の強い子供は目立ちやすい。コミュニケーションの問題を抱える子供で、成績が良い場合等、周りが全く気付かないまま中学高校と進んでしまうことはよくある。やはり日頃から丁寧な子供との関わり方を担任教員がする必要があると思うし、気になる事は専門家に意見を伺いながら情報を共有し、保護者にも事実を伝え、理想は保護者と一緒に子供を育てていくということだが、保護者の方が敬遠しがちな場合は、それを丁寧に繰り返していくしかないのではないかと思う。そして幼児の事を学ぶことだけでなく、保護者との関わり方を学んでいくということも幼稚園・保育園の先生方には求められてきているのではないかと感じる。研修の内容として、保護者との連携や保護者への対応等も学べるような研修会があると良いのではないかと思う。そして研修会で学んだことは、工夫して各施設で共有し、できることは実践していくことが大事だと思う。資料22・23ページで委員の皆さんからいただいた意見がその解決方法ではないかと思う。情報共有の時間を作り出すという点については幼稚園では、子供が降園後、会議を開けばよいが、保育園の場合は、正規職員のほかに臨時の職員もいて、時間で契約している場合、子供と関わる時間が終わればそこで勤務時間終了になる。打合せの時間、情報共有の時間に30分、余計に予算を取ってもらい、そのような時間を作るということが求められてくると思う。上尾市の裁量で30分、1時間多めに時間を設定できるような工夫ができれば良いと思う。これについても、次の課題である加配教員についても経費がかかってくる課題ではあるが、加配教員については、ルール上、加配教員をつけたくても自由に付

意見・感想 【首藤委員長】	けられない現状がある。せめてグレーゾーンの子供に関しては、専門家が判断すれば加配教員がつけられるという何か特別な手立てを上尾市で実践できるようになれば良いのではないかと思う。すぐには実践できないと思うが、上尾市の幼児教育、教育基本計画の中に位置付けていけたら良いのではないかと思っている。

協議（２）幼児・保育施設での発達支援の必要な幼児の小学校への接続に係る現状と課題の把握について

意見・感想 【長委員】	保育園では、発達支援専門員巡回事業を活用しながら、精一杯のことを行っている。小学校と連携し、小学校に就学した子供たちがどのように成長しているのかを共有できると、保育園でも、良い振り返りになると思うし、次に発達支援を必要とする子供たちへの手立てについての学びに繋がるのではないかと思う。私の保育園では、平方小学校との連携を深めており、小学校の体験入学のようなことも行っていただいている。現在のコロナ禍では、なかなかできないが、各小学校が、平方小学校と同じように、園児を受け入れ、体験入学のようなことをしてくれたら良いと思う。給食体験もしていただいており、園児たちが安心して小学校へ行けているという現状がある。小学校に就学すると、幼・保とは環境が大きく変わり、それぞれ違う幼児施設から集まった子供たちが、一緒になることで、上手く適応できない子供たちが出てくると思う。小学校の先生に、幼・保にいる子供を見に来ていただきながら、発達支援の必要な子供については、サポートの教員を手立てとして付けていただけたらと思う。
意見・感想 【熊坂委員】	今は、小学校への接続を大事にしているので要録だけでなく、発達支援が必要な子供はできるだけ個別に小学校と連絡を取り、コロナ禍で今は難しいが、説明会ができなければ個別に聞き取りさせていただいている。大谷保育所のすぐ隣にある鴨川小学校では、１年生の授業の情報交換会を実施していただいている。就学した１年生の子供の姿を見せていただき、担任の教員と情報交換をする機会があった。就学後の子供たちがどんな生活をしているのか、ざっくばらんに担任教員と、「保育所ではこんな感じの子だったけど、小学校ではどうですか」といった形で、発達支援を必要な子供だけでなく就学した子供全員を対象に実施していただいた。このような機会を得たことで、保育所と小学校のつながりができた。コロナ禍の難しい時代ではあるが、このような機会があるとより有難いと思う。
意見 【安田委員】	加配教員という存在にとても助けられているということは分かるが、ただ、加配教員の関わり方をどの程度にしていくことが、小学校に就学した際に、スムーズな学校生活を送ることにつながるのかというのを、この協議会の場で少し検討しても良いのではないかと思うのだがどうか。
質問 【首藤委員長】	先ほど、幼・保の子供が小学校に就学した際に、特に配慮が必要な子供への支援がどのように接続していくのか、特に、発達支援相談センターとの関わりから、小学校ではそれに教育センターが関わっ

質問 【首藤委員長】	てくるので、その支援の連続性をどのように保障しているのかについて気になっている。情報が２つに分かれて混在しているところがないか等、お答えいただきたい。
回答 【小林委員】	発達支援専門員巡回事業にしても加配教員にしても、市等の行政が行っていることなので、答えられるものではない。ただ、要望としては、配慮を要する子供については、やはり身体的な事も含めて、必ず加配をつけていただきたい。専門員の巡回指導についても、幼・保での巡回指導を引き続き小学校でも受けられるような体制を、来年度は難しくても再来年度には改善策が出てくると良いと思う。
回答 【田中(栄)委員】	支援の接続においては、小学校へ就学する際に、幼・保との個別の情報交換での情報と、教育センターで所管する就学支援委員会からの情報の２つが小学校にあがってくる。それらの情報を突合させて対応するということは小学校ではしていない。どちらか先に来た情報をあてにしてしまうことが多いのではないかと思う。教育センターでの就学支援委員会の情報についても、学校に伝えてはいても、その情報が、担任教員まで下りてきていないというようなトラブルが起きていたこともあったため、教育センターから指導があり、しっかり担任教員まで伝えて、共通理解を図るようになっている。 安田委員が仰っていた、幼・保で個別に加配教員がついていたという情報が小学校に上がってくれば、小学校でもアッピースマイルサポーターをつけるという配慮につなげられるのではないかと思う。ただ、アッピースマイルサポーターも人数が限られているため、実際に、幼・保でどれくらいの子供に加配教員がついているのか気になった。
意見・感想 【首藤委員長】	幼・保で加配教員がついた子供の情報が小学校まで上がっているとは限らないということが意外だった。それは子供にとっても保護者にとっても小学校にとってもマイナスではないかと思う。
補足説明 【事務局】	就学相談について補足すると、まず、就学相談を希望する保護者が申し込みを行い、申込のあった保護者と子供に、実際に教育センターに来ていただいたり、教育センターの担当職員と教育心理専門員の二人で幼児施設を訪問し、子供の様子を把握させていただいたりしている。その状況をもとに、子供の望ましい就学先について、保護者と相談を重ね、その子供にとってどのような支援が必要なのか、その子供がどのような特性を持っているのか、発達検査の結果等を含め、保護者に伝えている。その際、その内容を進学予定の小学校に伝えても良いか許可を取ったうえで、就学相談を受けられる約９０人分の資料を作成し、各学校に届けている。資料の中身については、性格、社会性、数の概念、言語力等の内容について、聞き取った内容や見た様子等をまとめたものになっている。小学校では、その資料をもとに、支援の必要な状況であれば、アッピースマイルサポーターという加配職員をつけるかどうかの検討材料にしている。そのような流れで、就学相談を進めており、小学校への接続について教育センターも支援させていただいている。

意見・感想 【首藤委員長】	義務教育になれば、教育センターの役割はものすごく大きくなると思う。小学校・中学校の特質に合った支援のしかたを就学時に検討し、保護者と共有している。幼・保・小それぞれで、教育、保育の特色に合った支援を行っていることが分かった。私が危惧していることは、この支援が途切れていないかということで、支援が途切れてしまうと子供にとっても保護者にとっても良くないと思っている。一方で、個人情報の保護等の配慮が必要な面もあるとは思うが、できる限り連携を進めていただけたらと思う。
補足説明 【事務局】	幼・保では発達支援専門員巡回事業があるが、小・中学校での支援の一つとして、小・中学校が依頼をすれば、県立特別支援学校の特別支援教育コーディネーターが、学校を訪問し、気になる児童・生徒の生活の様子を見て、どのように支援をしていったら良いか、担当教員に指導・助言をしていただくという仕組みもある。
意見・感想 【首藤委員長】	様々な支援があるが、人や予算にも限りがあることも分かった。長委員からいただいた意見書には、保育園から小学校に積極的に様子を見に行ったり、声掛けをしたりというのを対策として出されている。幼・保・小の交流体験は非常に重要であり、小学校の協力は不可欠である。学校教育というのは年間スケジュールが決まっているため、計画的に進めて、教育課程の中に位置づけていただくように幼・保から働きかけないといけないという現実がある、それも積極的に行っていく必要があるという意見をいただいた。また、長いスパンで考え、幼・保で積み重ねてきた支援を小学校でも途絶えることなく続けて欲しいという要望があるが、まさにその通りだと思う。特に教育と福祉だと窓口が異なるため、支援が途切れないようにしなくてはならないし、それをまず保護者が了解することが大事と思う。保護者を支援の輪の中心に取り込んでいくということも私達に求められているのではないかと思う。まだまだご意見がある方もいるかと思うが、時間が過ぎているため、本日の協議はこれで終了させていただきたい。皆様の協力に感謝する。